

# 鎧と十字架（一）

四

浅原義雄

## 一．フランス語との出会い

葬式の有様を茲に記述する必要はあるまい。私は唯だく、年を経るに従つて、初めて鎧と十字架と、全く両立しない二ツのものを見た其の下谷の家が、神秘に思はれてならぬ事を云ひ現したのである。

祖母さまは彼の玄関の長押に掛けてある薙刀を小脇に抱えて、嘗て幕末の世の騒しい一刹那には、生命の遺取の瀬戸際にまで立たれた事があつたとやら。今では歌舞伎の舞台にしか見られない御守殿姿の其の女性が、どう云ふ動機で、遠い海の方から渡つて来た人の、新しい教を信ずるに至つたのか、私には其の深い真理の変化を推測することはできぬ。あゝ、唯だ不思議である。当時文明開化の大勢は歴史の權威を破損するのみ急であつた時代に於て、無礼無学なる明治の児の私に向つて、祖先が残した厳肅なる封建時代の宝物を、其のまゝに示してく

れた処は、実にあの下谷の古家ではなかつたか。同時に又、誤解せる国民の迷夢の猶明かに覚めざる時代に於て、偏狭なる島の児の私に向つて、異なる国の新しい宗教を示してくれた処も、実にあの下谷の古家ではなかつたか。あゝ、唯だ不思議である<sup>(1)</sup>。

永井荷風の幼児期の体験を知るうえで、「狐」とともに大変貴重な資料となる「下谷の家」のこの一節ほど、その後の荷風の文学遍歴を暗示している箇所はないものと思われる。荷風の作家としての履歴は、簡述すれば「地獄の女」や「夢の女」など初期の数多の習作を経て、「あめりか物語」、「ふらんす物語」で世の文学青年のエキゾチズムを掻き立てが、その後一転して「腕くらべ」、「おかめ笹」、「つゆのあとさき」、「溼東綺譚」等において、芸者、女給、娼婦と様々な女性の姿を飽くことなく活写した。そのかたわら、「日和下駄」や「雨瀟々」などで失われつつある江戸の名残を追い

求めて、かつ荷風の最高傑作と言われ、大正昭和の風俗を知る上でも貴重な資料となる『断腸亭日乗』を残したという構図になるだろう。

荷風の生涯は、「鎧」に象徴される江戸文明と「十字架」に象徴される西洋文明の狭間に生きた人生ではなかったろうか。荷風文学の根底には常に漢文を土台とした江戸趣味と、外国滞在で培った人生観と芸術観に裏付けられた欧米文学の素養が創作のバックボーンにあるように思われる。その中でもとりわけフランス文学が荷風に及ぼした影響は絶大なものであろう。フランス文学が日本の作家に及ぼした影響については、中村光夫氏の名著『〈評論〉永井荷風』に適切な言葉がある。

明治以来のフランス文学の影響について考える場合、そのもつとも興味ある典型が荷風であることは、おそらく何人も異論のないところでしょう。

明治文学に対するフランスの影響は多方面にわたって見られます。自由民権の声とともに紹介されたルソー、ユウゴオは別としても、フロオベル、ゴンクールなど自然主義の作家は、花袋や藤村に強い感化をあたえました。

『海潮音』が近代詩に及ぼした影響についてなど今更云うまでもなく、普通ドイツ系の教養の持主とされている鴎外のフランス趣味なども相当なものであったようで、晩年の彼はフラン

スの短篇を数多く訳しているだけでなく、自作の小説のなかでも、意味の解らぬ読者にはわずらわしくも気障とも思われるのではないかと思われるほど頻繁にフランス語を使っています。

しかしたんに文学作品に興味を感じ、その模倣を企てたという程度ではなく、その底に流れる作家の精神に触れ、生きた文化の影響を受けた作家は、おそらく、上田敏、永井荷風、「新生」以後の藤村の三人であろうと思いますが、そのなかでも荷風は、フランス文学への打込み方の深さ、その理解の消化に費した年月の長さ、またその影響を我国の風土に生かした工夫などの点で、断然群を抜いています。

おそらく彼ほどの才能と情熱を傾けて、フランス文学の感化をその血肉に享けた作家も、またそこに育てあげた孤独な文学の理念を巧みに我国の伝統に調和した作家もいないのです<sup>(2)</sup>。

永井荷風がフランス文学をその当時の作家としてはいかに深く理解し、自家業籠中のものとしていたかは、彼の実質的なデビューとなる『あめりか物語』の冒頭にシャルル・ボードレルの詩集『悪の華』の一節「旅」の一部を引用して作品上の効果を大いに高めていることでも証明できる。

唯だ行かんが為めに行かんとするものこそ、真個の旅人なれ。  
心は気球の如くに軽く、身は悪運の手より逃れ得ず、如何なる

故とも知らずして常に唯だ、行かん哉、行かん哉と叫ぶ。(旅  
—ボードレール)<sup>(3)</sup>

荷風が影響を受けたフランスの作家はボードレールただ一人にとどまらず、「断腸亭日乗」を読めば数多の詩人や、エミール・ゾラ、ギイ・ド・モーパッサン、アンリ・ド・レニエ、ピエール・ロティなど、それこそ枚挙にいとまがない。その裾野の広さは、赤瀬雅子氏の労作「永井荷風 比較文学的研究」を一瞥すればまさに驚嘆に値する。

中村氏がいう「春水とモウパッサンの合の子」永井荷風が、フランス文学の理念と技法をいかに消化し血肉化して、自己の作品に江戸情緒と巧みに融合させ変容させていったか、その受容の歴史を彼の作品から考察してみたい。その主題に入る前に、彼の核となっている江戸趣味の【鑑】の部分を形成した過程を彼の生い立ちから探ってみる。

人間は環境の動物だから、その人となりは時代の状況を抜きにしては語れないであろう。永井荷風は、明治十二年十二月三日、東京市小石川区金富町四十五番地に、父永井久一郎と母恒の長男として生まれている。永井久一郎の略歴は、秋葉太郎氏の「考證永井荷風」に詳しく書かれている。それによると尾張愛知郡出身で藩校明倫堂の教授鷲津毅堂に漢学を修める傍ら漢詩を森春濤に学んでいたが、師毅堂と共に上京して時代が要請している洋学に転じて箕作麟祥と

福沢諭吉に英語を学んだ。明治三年に大学南校貢進生となり、翌年にはアメリカのプリンストンの大学とニューブランズウィキの大学に留学して、帰国して文部省医務局、書籍館・博物館に勤務し、その後は日本郵船上海支店長や横浜支店長に天下りするという高級官僚の典型的な道を歩んでいる。明治十年に師鷲津毅堂の娘である恒と結婚し、長女が夭折して長男永井荷風が生まれるのである。祖父鷲津綺堂、父永井久一郎と家系に漢文学者の血を受け継いでいることは、文学者永井荷風の資質を知る上で等閑視えないであろう。奥野信太郎氏が「荷風と中国文学」で指摘しているように、それが荷風独自の漢文理解であったとしても江戸趣味への一助となっているのは間違いない<sup>(4)</sup>。

明治十二年といえば、西南戦争の余燼も治まり九段の東京招魂社が靖国神社と改称された年である。その前年の十一年には三新法に従って大区小区制を廃して十五区六郡がしかれて、明治新政府によって本格的に都市整備が進められて江戸から東京に生まれ変わろうとしていた時期である。この金富町は昭和二十二年に小石川区と本郷区が合併して文京区になり、町名も現在は春日二丁目に変わってしまった<sup>(5)</sup>。江戸時代の時代に出された「尾張屋板切絵図」を見ると、この金富町は陸尺町となっておりさらに下ったところには「安藤坂」の地名発祥の元にもなった三万八千石安藤飛驒守直祐侯の屋敷がある。近くには現在北野神社と名が変わっている牛天神や金剛寺などの神社仏閣の間に、旗本の御書院番組大縄地や御賄方

大繩地が点在している完全な武家地である。其の生家跡には、「鶴八鶴次郎」の作品で第一回直木賞を受賞した作家川口松太郎が建てた「川口アパート」から道路を隔て斜め前に文京区が作成した「永井荷風生育地」<sup>(5)</sup>という碑が残るのみである。

この金富町の周辺は、江戸時代には伝通院の門前にあって賑わった旗本や御家人が住む町であったが、御一新のために駿府に下った徳川慶喜の後を追ってほとんど空になり人気も疎らな寂しい場所に変わってしまった。そのあたりの地形は「伝通院」に詳しく描写されている。

寺院と称する大きな美術の制作品には偉大な力を以て其の所在の土地に動し難い或る特色を生ぜしめる。巴里にノオトル・ダムがある。浅草には観音堂がある。それと同じやうに、私の生れた小石川をば（少くとも私の心だけには）鮑くまで小石川らしく思はせ、他の町から此の一区劃を色別させるものはあの伝通院である。減びたる江戸時代には芝の増上寺、上野の寛永寺と相対して大江戸の三霊山と仰がれたあの伝通院である。

伝通院の古利は地勢から見ても小石川と云ふ高台の絶頂にあり、中心点であらう。南の方は其の源を関口の滝に発する江戸川の其の麓を洗はせて、小石川の高台は水道端から上る幾筋の急な坂によつて、次第／＼に伝通院の方へと高くなつて居る。東の方は本郷を向うにして、富坂をひかへ、北は水川の森を望

んで極楽水へと下つて行き、西は丘陵の延長が鐘の音で名高い目白台から、物語で知らぬ者はない高田の馬場へと続いてゐる。

この地勢と同じやうに、私の幼い時の幸福なる記憶も、伝通院の古利を中心として、常に其の周囲から離れては居らない<sup>(6)</sup>。

荷風の生家は「赤城目白を一目にして常に富岳を望み、また眼下には江戸川の清流を（「大窪だより」）見おろせる高台にあった。その地を洋行帰りの高級官僚であった荷風の父が、「水戸の御家人や旗本の空屋敷が其処此処に売物となつてゐたのをば、維新の革命があつて程もなく、新しい時代に乘じた私の父は空屋敷三軒ほどの地所を一まとめに買ひ占め、古びた庭園や木立そのまゝ、に広い邸宅を新築した」（「狐」）。広い邸宅には家族の外に、書生や女中も住み込み、家全体が「書齋や客間の床の間に、何如璋、葉松石、王漆園などいふ清朝人の書幅の懸けられて」（「十九の秋」）いて、子供には近寄りがたい高尚な雰囲気を漂わせている。その家で彼の父は、「十畳の居間に椅子卓子を据え、冬はストウプに石炭を焚きて居られたり。役所より帰宅の後には洋服の上衣を脱ぎ海老茶色のスモークジャケットに着換へ、英国風の大きなパイプを脚へて読書して（「洋服論」）いたのである。さらに食事も「予が家にては其頃既にテーブルの上に白き布をかけ、家庭風の西洋料理を食し（同）」ていた。母親恒が彼女の実母鷺津美代とともに牧師スピナーが開催した講習会で修得した西洋料理の調理法を記したノートには、ピ

ーフステーキやハンブルグステーキの材料やソースの作り方が書き留められているところを見ると<sup>(7)</sup>、その当時の世間一般の家庭とはかけ離れた生活をしていることがよく分かる。

荷風の子供心に映った父母の姿は、怖い父親と優しい母親からなる戦前の日本の一般家庭にある典型的なものである。父親の姿は、子供の眼には「角張った父の顔が、時としては恐ろしい松の瘤よりも猶空恐しく思はれた」(「狐」)ほど怖い存在であったと見え、このイメージは終生変わらない風貌となつて様々な作品に登場する。役所勤めの傍らにも乗馬や弓道で鍛えた父の身体は、荷風が大人になつても「少し其の口髯が白くなつたばかりで、銅のやうな顔色はますます輝き、頑丈な身体は年と共に若返つて行くやうに見え」(「監獄署の裏」)て荷風を圧倒する。しかし子供の眼は厳しく、「冷笑」の中で父親の言行の不一致を鋭く見破っている。

父は儒教に対して絶対の信仰を持つてゐたけれど、聖人ではないから、此れを平素座臥の生活には完全に実行する事の出来なかつたのが、反抗の眼鏡をかけた私の眼には、父は己れが言行の不一致には恐ろしく無神経な人であると思はしめた。例へば父が私に向つて屢説明する行儀作法の如きも、父は己れの座臥には一向其れを実行しないで平気で居る<sup>(8)</sup>。

此処まで断罪すると世の父親にとっては少し酷な話である。ギユ

スターブ・フローベールが医者である自分の父親のアシル・クレフアス・フローベールに対して、富と名声だけを追い求める世俗的な医者としてでなく、哲人的な人間として仰ぎ見ているのはまさに好対照である。それに反比例して母親の姿は「監獄署の裏」で、子供時代には慈母観音のように優しい姿で登場する。

閣下よ。私の母は私が西洋に行く前までは、実に若い人でした。さほどに懇意ではない人は、必ず、私の母をば姉であらうと訊いた位でした。江戸生れで大の芝居好き、長唄が上手で、琴もよく弾きました。三十歳を半ば過しても、六本の高調子で、吾妻八景の、

松葉かんざし、うたすじの、道の石ふみ、露ふみわけて、  
ふくむ矢立の、すみいだ河……

と云ふ処なぞを、楽に歌つたものでした。其で居て、十代の娘時分から、赤いものが大嫌ひだつたさうで、土用の蟲干の時にも、私は柿色の三升格子や、水浅黄の千鳥に白浪の友禪染の外、何一ツ花々しい長襦袢なぞ見た事はなかつた。私は忘れません、母に連れられ、乳母に抱かれ、久松座、新富座、千歳座などの棧敷で、鰻飯の重詰を物珍しく食べた事、冬の日の置炬燵で、母が買集めた彦三や田之助の錦絵を繰り広げ、過ぎ去つた時代の芸術談を聞いた事。あ、！ 凡ての物を破壊してしまふ、「時間」ほど酷いものはない。閣下よ。私は母親といつま

でもく、楽しく面白く華美一ばいに暮したいのです。私は母の爲めならば、如何な寒い日にも、竹屋の渡しを渡つて、江戸名物の桜餅を買つて来ませう<sup>9)</sup>。

父親の怖さと母親の優しさは、文学者にとって飽くことなく繰り返されるテーマの一つであり、荷風だけことさら強調すべき問題ではない。しかし、彼が子供心に父の母親に対する横暴を許せなかつたのは、『冷笑』を読めばよく理解できる。

若しか私は母親の優しい言葉と細密な情愛とに触れる事がなかつたら、父に対する烈しい反抗の邪念は私の身を恐ろしい墮落と自暴自棄の淵に浮瀬なく投込んで了つたに違いない。抱かれたる其の暖かい懐中から私の眺めた優しい淋しい母親の面は、私の記憶の中に、宛ら聖母マリアの像の如くいつも消えずに残つて居る。母に対して濺いだ感謝と欣慕の情とは、かくの如く私が感情の激動を静め、墮落を保護して呉れたが、同時にまた、其れが爲めに一層父を憎く思はせたのも事実である。

父は厳格な人だけに結婚以来一度も品行上から母の心を傷ませるやうな事はしなかつたけれども東洋の豪傑的粗放な其の性質は、己の健康の注意や書齋の整理をすら自分一人ではなし得ない。立つにも坐るにも母を呼び付けて、身の周囲の雑用を便じて貰うと云ふ風であつた。其の上に父は食物の好悪の驚くほ

ど激しい人であつたから、母はいつもく菜の賣方の拙さと万事に気がきかない事を攻撃叱咤を以て日を送つて居た。私は事実を誇張して云ふのではない。生れてから今日まで、父が私の母に向つて優しい言葉をかけたり、或は母のなした事をよくできたと賞めて居た事を一度だつて聞いた事はないのである<sup>10)</sup>。

古き時代の良妻賢母の見本のようなこのように若く美しい母親も、歳月のフィルターを通すと、「小さく萎びた、見るかげもないお婆さん」(『監獄署の裏』)に變貌してしまふから時は残酷である。サルトルは「父と子」と題するフロアベール論の中で、フロアベールがクロワツセの「隠者」として作家生活に専念するようになった最初の動機を、名医ととして尊敬を集めている「父」に対する「無私の愛」の中に見出している。形は違うが、荷風もエリート官僚として世の中を渡つていく父親に対する畏怖と、そのようになりえない敗者としての自分の姿をおほろげながら感じていたことは確かだ、そのことが父親と違う道に進む遠因となつたといえなくもない。両親の対照的な姿は数多の批評家の指摘するところだが、そのことを過度に重視する愚は避けなければならない。

荷風の人格や感受性の形成に影響を与えたのは両親がすべてではない。その家族以外に出会つた様々な人や、育つてきた環境もまた無視はできない。良家の坊ちゃんにありがちの乳母日傘で育てられただけに感受性の強い蒲柳の質であつたのも「狐」で窺い知れる。

私は小学校へ行くほどの年齢になつても、伝通院の縁日で、からくりの画看板に見る皿屋敷のお菊殺し、乳母が読んで居る四谷怪談の絵草紙などに、古井戸ばかりか、丁度其の傍にある朽ちかけた柳の老木が、深い自然の約束となつて、夢にまで私をおびへさせた事が幾度だかしれなかつた<sup>(11)</sup>。

しかし、永井家にとって初めての長男だけに、母親や乳母に真綿で包まれたように大事に育てられた体験が、彼のその後の資質をはぐくむに大いに役立った。「伝通院」で荷風自身が述懐している次の箇所は注目に値する。

そもく私に向つて、母親と乳母とが話す桃太郎や花咲爺の物語の外に、最初のロマンチズムを伝えて呉れたものは、此の大黒様の縁日に欠かさず出て来たカラクリの見世物と辻講釈の爺さんであつた<sup>(12)</sup>。

言葉が文字として捉えられる前に耳からはいる音読の効用は無視してはならないであろう。これと同じようなケースとして、フロールが家の真向かいに住んでいたミニヨ爺さんに朗読して貰つた「ドン・キホーテ」によつて文学の持つ面白さを開眼された事実があげられる。朗読の効用に関してはアルベール・チボーデの至言が

ある。

ミニヨ小父さんの朗読には、大きな意味があつたと言わねばならない。文学が耳からギユスターヴにはいつてくるものであり、特殊な声音や気取つたしぐさや観客に向ける儀礼的なポーズなどによつて、文学的な言葉と文学的でない言葉とが区別されるのだ<sup>(13)</sup>。

朗読もさることながら、人間の情感に一番強く訴えるものとして音楽に勝るものはないだろう。そういう意味では、「楽器」の次の箇所も重要である。

小石川の家にもた十二三の頃の事であつた。父の家の裏手は森のやうに木立の繁つた恐ろしい崖であつたが、其の下の貧民窟を越して、丁度父の家の高台と相對して坂地の中腹に建てられた下宿屋の窓から、或夜連管で合奏してゐる尺八の調の聞えるのに、自分は実に何とも云へぬ程烈しく心を動かされた。自分もつと年の行かない子供の時分から、已に夏の毎夜を流して来る新内の三味線や、其の夜始めて感じた尺八の調や、または遠い赤城下の方から風の具合で聞えて来る祭りの夜の太鼓の音などに対しても、われながら解らぬ神秘的な感動を覚えた其の瞬間の心の状態をば、今だにはつきり記憶している<sup>(14)</sup>。

邦楽や洋楽を問わず音楽が永井荷風の作風に及ぼした影響は、今後大いに研究されなければならない分野である。荷風は音楽と文学の相乗効果を「文章の調子と色」で、後年次のように述べている。

私の云ふ文章の調子とは何を云ふことであるかと言へば、それを引き出して斯うであると言葉で説明することは些つと難しいが、引き括めて見れば、文章に音楽的調子を持たせることである。一体音楽と云ふものは、色や形を以て人間に或るものを伝へるのではなく、目に見ることの出来ない音の調子を以て、悲しいとか、嬉しいとか、その他いろ／＼な間の複雑した細かい感情を伝へるものである。之れが絵画になると、いろ／＼な色の配合を以て、様々な心持なり感情なりを人に伝へるものである。所が、文章はその中間を行つて、耳に響へるところの音楽でも、目に響へるところの絵画でも、併せて用ゐることが出来るものである。文章の上に七五とか八六とか、然く際立つた調子を用ゐて、文章の形式を韻文にしくなくても、散文として、夕暮なら夕暮の感じ、朝なら朝の感じ、其他、嬉しいとか、悲しいとか云ふ微妙な心持を、微妙な文章の音楽的の調子に依つて、人に伝へることが出来ると信じて居る。そして、私は私の文章の中に、矢張り音楽的の調子を加味することに苦心して居る。即ち文字と文字とを綴つて行く其中に、自からなる調子を

作つて、其間に言葉では現はし得られぬ所の情調を、読者の胸へ自ら刻んで行くと云ふ方法である<sup>(15)</sup>。

お坊ちゃんて育つた荷風は、「団子坂の菊人形だの、奥山の見世物などは家へ出入りの若い者や抱え車夫などにつれられて、文字を知る前から已によく知つていた」(「祝盃」)ことや、「自宅に宴会のある時は、大勢お酌に来る藝者から、坊ちゃまといはれて膝の上を抱かれた事もあり、お客様のまだ来ぬひまを雛妓と遊んだ上句、桃割の誓をこはして母親から叱られた」(「祝盃」)経験は貴重である。視覚からは団子坂の菊人形、奥山の見世物、藝者の艶姿、聴覚からは三味線、琴、尺八とくれば、もうこれだけでも江戸情緒の素養を身につけるに環境的には申し分ない。

高級官僚の子供だけに幼少年期に受けた教育も破格である。荷風は明治一七年の五歳の時に、日本に最初にできたお茶の水女子高等師範学校附属幼稚園に通園している。その間の事情は「洋服論」に詳しい。

余が始めてお茶の水の幼稚園に行きける頃は世間一般に西洋教養熱甚熾にしてかの丸の内鹿鳴館にては夜会の催しあり女も洋服着て踊りたる程なり。されば余も幼稚園へは洋服を着せられて通はされたり。これ余の始めて洋服なるものを着たる時なれども如何なる形のものなりしや能く記憶せず。小学校へ赴く



頃には海軍服に半ズボンをはきたる事たしかに覚えたり。襟より後は肩を蔽ふ程に広く折返したるカラーをつけ幅広きリボンをつ胸元にて蝶結にしたり。帽子は広き鍔ありて鉢巻のリボンをつけたり。ズボンは中学校に入り十五六歳になるまでも必ず半ズボンなりき<sup>(16)</sup>。

荷風は明治十九年七歳の時に小石川の生家に近い黒田小学校に入學するが、十歳になった明治二十二年に東京府尋常師範学校附属小学校高等科に転校している。そしてその間にも父の永田町の官舎から神田錦町の東京英語専修学校へ正規の教育課程以外に通ったのも、息子にエリート・コースを歩ませたいという父親の配慮であろう。荷風十二歳の明治二十四年には神田一ツ橋の高等師範学校附属学校尋常中学科に入學する。江戸時代の寺子屋から明治政府の学制改革の過渡期を経ているために色々な変遷はあるにせよ、普通の子供より転校がはげしいのは事実である。

小学校時代の荷風は、宮城達郎氏の「学校時代の永井莊吉」によれば、学業成績は悪いとはいえない。少なくとも、少年荷風はフローベールが「狂人の手記」で述べた「ぼくは十歳のときから学校にはいり、早くもそこで人間に対する深い嫌悪をおぼえた<sup>(17)</sup>」のような絶望感や拒絶感は抱かなかつたであろう。しかし、順調に名門校に通学したものの、明治二十七年の十五歳の時に、痲癩で下谷の帝国大学第二病院に入院し、翌年に転地療養のために小田原の足柄病院

転院や逗子の永井家別荘で保養するあたりから少しづつエリート・コースから外れてくる。明治二十九年の十七歳で岩溪裳川に漢詩作法を学んだのは後の文学者永井荷風の誕生には貢献大であるが、同時期に荒木竹翁のもとに尺八の稽古に通ったことは学業にプラスになるとは言い難い。

父親の期待に反して十八歳になった明治三十年六月に第一高等学校の入学試験に不合格となってしまう。しかたがなしに高等商業学校附属外国語学校清語科に籍を置いたけれども学業には身が入らず、翌年の九月には「簾の月」を携えて広津柳浪の門下生となる。挙げ句のはてには、二十歳では三遊亭夢之助の芸名で落語家六代目朝寝坊むらくに弟子入りする始末である。さらに放浪遍歴の旅は止まず二十一歳となった六月には三宅青軒の紹介で福地桜痴門下の狂言作者見習いになり、西暦が二十世紀に変わった明治三十四年の二十二歳には、福地桜痴の後を追って「日出国新聞」の雑誌記者となっている。

小説家の弟子、落語家の卵、歌舞伎狂言作者見習い、駆け出しの雑誌記者と列挙すれば、今の時代ならさしずめ花形職業への道の第一歩となるかもしれない。明治という時代にこれらの職業は正業とお世辞にもいえず、どれをとってもまともな仕事ではなく社会的評価は低いものであつたらう。官界のエリートであった父親の親類縁者は、学者や高級官僚が綺羅星の如く並んでいる。そのような家系では、荷風以外は誰一人として身を置くような場所ではなかつた

であろう。そのような激動の時期に「書かでもの記」で述べられて  
いるように、荷風は閉塞状態にあった現状を打破すべく別天地を求  
めてフランス語を習い始めるのである。

新聞記者をやめたる後は再びもとの如く歌舞伎座の楽屋に入  
らん事を冀ひしかど敬して遠けらるゝが如くなりしかばこゝに  
意を決し志を改めて仏蘭西語稽古にと暁星学校の夜学に通ひ始  
めぬ<sup>(18)</sup>。

(続く)

注

(1) 岩波書店版「荷風全集」第七卷二七七頁。以後「全集」。

(2) 「評論」永井荷風、筑摩書房、二七頁―二八頁。

(3) 「全集」第四卷六頁。

(4) 「荷風の日本漢文学ことに江戸末期の文人詩人たちの作品に対する愛着は、  
荷風文学理解の上からすれば、かなり細心に検討する必要があると思う。

なんとすれば荷風の眼に映じた大窪詩仏、大沼枕山、館柳湾、成島柳北等  
は、当時の、あるいは後代の漢学者や漢詩人たちの眼に映じた詩仏、枕山、  
柳湾、柳北等とはちがったものであったからだ。

それらはいずれも荷風においては蜀山人、種彦、春水等に通じ得るな  
ものかを感じさせるものがあつたのである。

ことばをかえていうならば、外国文学としての中国文学の峯は、江戸漢

文学という谷あいの小径を通じて、江戸戯作者の文学の峯に、ひとつの散  
歩路ができたということになる。」「日本文学研究大成 永井荷風」坂上博  
一編、国書刊行会、三〇八頁

(5) 永井荷風生育地

(文京区春日二―二〇―二五あたり)

永井荷風(一八七九―一九五九)小説家、随筆家、本名莊吉。別号断腸  
亭主人など。作品には「あめりか物語」、「腕くらべ」、「溼東綺譚」や「断  
腸亭日乗」などがある。

荷風は、明治二二年(一八七九)一二月、すぐ左の細い道の左側二〇番  
二五号あたり(旧金富町四五番地)で生まれた。そして、明治二六年飯田  
町に移るまで、約一三年間住んだ。(その間一年ほど麹町の官舎へ)

明治一九年には、黒田小学校(現区立五中の地)に入学し4年で卒業し  
て旧竹早町の師範学校附属小学校に入った。

「狐」(明治四二年)という作品に、生家の思い出がつつられている。

「旧暮の御家人や旗本の空屋敷が其処此処に売り物となっていたのをば、  
其の頃私の父は三軒ほど一まとめに買ひ占め、古びた庭園の木立をそのま  
まに広い邸宅に改築した。……」

小石川は、荷風が生まれ育つた地で愛着が深く、明治四一年に外国から  
帰ってくると、このあたりを訪ねて「伝通院」を書いた。「私の幼い幸福  
なる記憶も此の伝通院の古刹を中心として、常に其の周囲を離れぬもので  
ある……」とある。

―郷土愛をはぐくむ文化財―

- (6) 「全集」第七卷二〇四頁。
- (7) 「永井荷風と東京」、江戸東京博物館一九九九、十九頁。
- (8) 「全集」第七卷九六頁。
- (9) 「全集」第六卷四六頁。
- (10) 「全集」第七卷九七頁。
- (11) 「全集」第六卷八三頁。
- (12) 「全集」第七卷二〇八頁。
- (13) 「フローベル論」A・チボーア著、戸田吉信訳、冬樹社、一九頁。
- (14) 「全集」第七卷四一四頁。
- (15) 「全集」第六卷四〇三頁。
- (16) 「全集」第一二卷山三六八頁。
- (17) 「フローベル全集七卷初期作品Ⅱ」、筑摩書房、八頁。
- (18) 「全集」第一三卷二九八頁。